

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

平成30年10月発行

教育相談 第141号

対象
校種

小学校 中学校 義務教育学校
高等学校 特別支援学校

保護者との連携を深める支援体制の在り方 —「学校楽しいと」の活用を通して—

子供の支援に当たっては、教師と保護者が子供の情報を共有し、どのように支援をしていくかを確認する体制を築いていくことが重要である。そこで、教師と保護者との連携の在り方について述べ、具体的な方策として「学校楽しいと」を活用した保護者面談の進め方を紹介する。

不登校の割合やいじめの認知件数は、依然として高い状況にあり、全国の小学生の暴力行為の発生件数（図 1）においては、近年、増加の傾向がある。

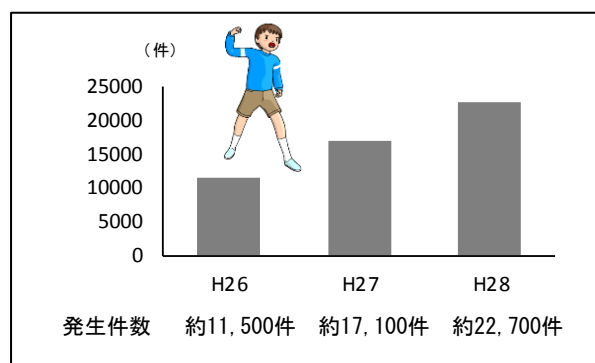


図 1 近年の児童の暴力件数の状況（文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」を参考に作成）

このような不登校やいじめ・暴力行為等といった問題行動の背景には、インターネットの急激な普及・進化による生活環境の変化や、少子高齢化等の社会的課題、そのほか様々な要因が複雑に絡み合っている。

生徒指導は、子供が自ら課題を解決しながら自己実現を図っていくことができる自己指導能力を育成することがねらいである。そのために、教師は保護者とのコミュニケーションを深め、子供のよい面の情報である「強み」

を共有しながら専門的な助言をするなどして、信頼関係を築き、密接に連携して支援する体制づくりが重要となる。

子供の「強み」

- ・ 優れているところ
 - ・ 努力しているところ
 - ・ 伸びているところ
 - ・ 継続しているところ
- など



そこで、本稿では、保護者と継続的かつ発展的な連携を図るための基本的な姿勢と、その具体的な方策として「学校楽しいと」を活用した保護者面談の進め方について述べる。

1 保護者との連携の在り方

保護者は、出生時から子供の成長を見ており、子供の生活全般に幅広く関わる重要な支援者である。集団生活の場である学校での指導・支援の成果や課題を保護者が家庭教育に生かすことで、よりよい子供の成長を促すことにつながり、そのことが保護者との連携を強固にし、学校と保護者がより協働的な関係を築いていくことができるようになることを期待される。

教師と保護者は、共に子供を育てるパート

ナーであり、教師は保護者をチーム支援の一員として位置付けることが大切になる。したがって、保護者が学校の指導・支援に積極的に参画して自己の意見を述べることができるように、保護者自身の置かれている状況や悩みを傾聴して受容し、保護者が家庭教育の役割に主体性をもてるように連携することが必要である。

2 保護者との連携を継続するためのコミュニケーション

保護者は、子供の将来への願いや期待、家庭教育の悩みや不安など様々な思いを抱えている。そのため、カウンセリングの「治そうとするな、分かろうとせよ」という基本姿勢（カウンセリング・マインド）を心掛けて、保護者からの相談に応じることが大切になる。

— カウンセリング・マインド —

- ・ 「困った保護者」ではなく、「困っている保護者」として捉え、保護者の立場に寄り添う姿勢を心掛ける。
- ・ 保護者の意見は丁寧に傾聴して受容し、保護者の願いや思いを共感的に理解する。



したがって、学校と保護者が信頼関係を構築して連携を図っていくためには、単なる情報伝達ではなく、保護者が子供についての情報を共有したいと思えるようにコミュニケーションを図ることが大切である。そのためには、日常的に連絡帳や通信、日記などを積み重ね、保護者の信頼感や安心感を高めていく取組が必要となる。

教師は、保護者とコミュニケーションを深めることを通して、保護者の子供に対する率直な思いや悩み、願いなどを共感的に理解することができるようになり、保護者面談をタイミングを逃さずに実施できたり、保護者の学校教育への積極的な参画を促したりするこ

とができるようになる。保護者との連携を継続するためには、教師が一方的に指示や提案をしたり決定権をもって優位に立って話を進めたりする姿勢であると、保護者の話を傾聴することを妨げることになるため注意が必要である。また、教師が専門的な用語や概念で説明すると、保護者は不安な状態になることがあるため、丁寧に説明をする配慮が必要である。

3 保護者との連携を深める面談の在り方

保護者は、教師との面談を貴重な機会と捉えて、子供への支援に関する様々な情報を知り得たいという願いや期待をもっている。このことから、面談で子供の問題や困難な面ばかりを強調すると、保護者は責任感から自信を喪失し、教師に自分の考えや思いを語らなくなってしまう場合もある。また、保護者は、家庭生活では見えない集団の中での子供の「強み」を理解することで、子供を肯定的に評価できるようになり、教師との連携に意欲をもてるようになることが期待される。つまり、教師と保護者は、「強み」を基にした子供の支援方針を共に話し合う面談をすることを通して共通認識が深まり、有益な情報を共有する支援者として対等に連携できる体制を築けるようになる。したがって、保護者との面談では、教師は子供の「強み」を具体的に伝えられるように把握しておき、保護者との連携に子供の「強み」を生かしていく視点をもつことが重要になる。

(1) 「学校楽しいと」の活用

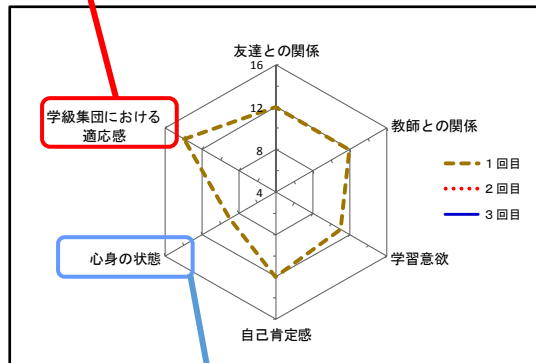
教師は、日々の教育活動の中で子供の「強み」に焦点を当てて情報を収集する取組が大切になるが、当センターが開発した「学校楽しいと」を活用してアセスメントする^{*1}ことにより、子供自身が認めているストロングポイントから「強み」を見取ることができる。

^{*1} 「県いじめ防止基本方針」(H29.10)には「学校楽しいと」のアセスメントの必要性が述べてある。

ストロングポイントのアセスメント

「学校楽しいと」から見取るストロングポイントとして、以下の①～④が考えられる。

- ① レーダーチャートにおいて相対的に値が高い観点を示しているところ

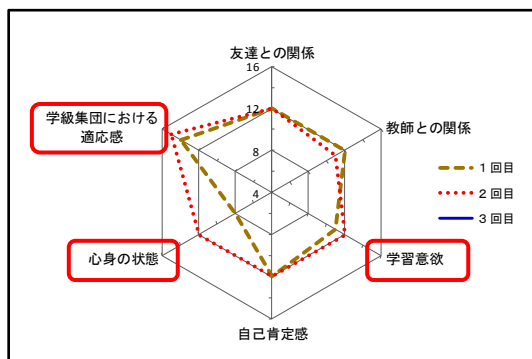


- 相対的に値が低い観点は、困った状態を示すウィークポイントとして見取る。

- ② 下位項目の回答において、肯定的な回答（3か4）を示している項目

3	学級の中にいると、明るく楽しい気持ちになる。	😊	3
11	学級の人々と一緒に学校行事に参加したり、活動したりするのは楽しい。	😊	4

- ③ レーダーチャートの比較において好転している観点



- ④ 下位項目の回答の比較において値が高くなった項目（特に否定的な回答から肯定的な回答に変容した項目）

14	おなかが痛くなったり、下痢をしたりする。	😊	😊
		3	4
20	頭が痛くなるときがある。	😞	😊
		2	3
26	気分が悪くなることがある。	😞	😊
		1	3

(2) 活用の留意点

「学校楽しいと」は、子供が、保護者ではなく教師に対して回答する質問紙であるため、教師が保護者に「学校楽しいと」の結果を直接渡してしまうと、教師と子供との信頼関係を崩してしまう危険性がある。そのため、保護者との面談で「学校楽しいと」を活用する場合は、“お子さんの学校適応感はこのような状態ですが、何か気付かれたことはありませんか。”と尋ねるなどして保護者のアセスメントを引き出し、子供のことについて共に考えるパートナーとして協力を求める姿勢が重要である（図2）。



図2 保護者に「学校楽しいと」を提示する場面

子供の支援を計画的、効率的に進めていくためにも、保護者面談の場を学校と保護者が連携した支援体制を確立する機会になるようにしたい。そのためには、教師は保護者に対して、子供の「強み」や「明確な支援目標」「具体的な手立て」を伝えられるように整理しておくことが必要であり、また、保護者の意向を汲み取りながら指導・支援の内容を柔軟に検討していくことが大切になる。

保護者面談後は、指導・支援の実践を通して観察したことを記録し、保護者と共に子供の行動面や学校適応感などの心理面にどのような効果や変容が見られるようになったかを評価することが大切である。連携の成果とその後の課題を相互に確認する支援体制を築くことが、継続的かつ発展的な連携へとつながっていくものと期待される。

4 「学校楽しいと」を活用した保護者面談の対応事例

以下に「学校楽しいと」を活用した保護者面談の実際を示す。

【A男の保護者との面談の場面】 は「強み」、 は支援策を示す

中学1年生のA男は、1学期に比べて友達関係が広がり、教師に対しても明るい表情を見せるようになったが、2学期の中旬から、何か悩みごとを隠している様子を見せるようになった。そこで、担任は、A男に教育相談で事情を尋ねてみたが、表情を曇らせて語ろうとしなかったため、PTA終了後に保護者と面談を実施した。以下は、その面談の途中からの会話である。

担任：A男君は、1学期に比べて笑顔が多くみられるようになり、クラス会議で進行を務めるなど意欲的に活動する姿がよくみられるようになりましたね。

保護者：えっ、そうなのですか。学校のことをあまり話さないで…。驚きました。

担任：先日、「学校楽しいと」という調査をしたのですが、A男君は今の自分の気持ちをこのように回答して私に伝えてくれました。この結果からも委員会活動や学校行事で充実感を感じているメッセージが伝わってきます。（ストロングポイントから「強み」を伝える）

全体的に1学期よりも学校に適應できるようになっていることが読み取れたのですが、18番の「自分としては良いところがあると思う」の項目が「1」になっているのが気になっています。お母さんは、この回答を見て、何か気付いたことはありませんか？（保護者のアセスメントを引き出す）

保護者：…。（考えている時間の沈黙の場面は大切に）

そう言えば、最近、褒めることよりも叱ることが多くなった気がします。この前も「中学生になってどうしてそんなこともできないの!」とか、「A男は小学生の頃から成長しないね。」と注意したことがありました。その時、A男は、家の壁を蹴ったり、自分の部屋を散らかしたりして怒りを物にぶつけていました。

担任：そのようなことがあったのですね。先日の教育相談で表情が暗くて元気がなかった理由が分かりました。

保護者：この「学校楽しいと」を見て、A男が自分のよいところを見つけない気持ちになっているのが、今、何となく分かるような気がします。でも、どのようにしたらよいのでしょうか？

担任：A男君は、学校での出来事をお母さんやお父さんにたくさん話をして、頑張っている姿を知ってほしい、認めてほしい気持ちが強くあるのかもしれないですね。1学期の頃、私に対してあまり自分の気持ちや思いを話してくれなかったのですが、“そう思っているのだね”、“そう考えているのだね”と聴く姿勢を大切にしていたら、いろんなことを話してくれるようになりました。家庭でA男君から学校の話聴く時間を設定されたらどうでしょうか？（家庭で具体的にどのような支援ができるかを提案しながら話し合っていく）

保護者：そうですね。さっそくA男のよいところを見つけて認めるように話を聴く時間を作りたいと思います。

担任：学校でA男君の頑張っているところに気付いたら、その時は家庭へ連絡したいと思います。学校と家庭とでA男君のよいところを見つけて、協力し合って情報交換をしていきましょう。

保護者：そうしていただくと家庭でもいろんな話ができるようになります。よろしくお願いします。

観点	質問	1回目	2回目	3回目
教師との関係	2 学校には、悩みや心配を相談できる先生がいる。	2	3	3
	10 学校には、自分のことを理解してくれる先生がいる。	2	4	3
	16 学校には、自分が間違えや失敗しても、きちんと話を聞いてくれる先生がいる。	3	3	3
	22 学校の先生たちは、自分に対してみんなと同じように公平に接していると思う。	3	3	3
自己肯定感	4 委員会活動や係(当番)活動での自分の仕事は、みんなの役に立っていると思う。	3	4	3
	12 学校行事の計画や準備をやり遂げたとき、「よくがんばったなあ」「よくやったなあ」と思うことがある。	3	4	3
	18 自分には、自分なりのよいところがあると思う。	2	1	1
	24 他人から好かれている方だと思う。	3	3	3

このように、「学校楽しいと」のストロングポイントから子供の「強み」を見取ることに着目しながら、保護者との連携を図ることで、児童生徒の学校適応感をよりの確にアセスメントできるようになり、また、保護者との信頼関係を深められるようになる。

保護者との連携には、担任などの特定の教師が全ての責任を負うのではなく、学校全体で保護者との支援体制を築いていくことが不

可欠である。そのためにも、保護者面談の成果は、学年会や委員会などの組織に還元できるようにし、教師間で情報を共有した連携が図られるようにしたい。

－参考文献－

- 文部科学省 平成 27－29 年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』
- 児童心理 『保護者面談・親面談を深める』平成 25 年、金子書房

（教育相談課 宇都 慎一朗）